

〈贈る言葉〉

Scott Wellman 先生、 Barbara Fujiwara 先生に感謝を込めて

若 本 夏 美

Scott Wellman 先生は1989年の入社以来今春退職されるまでの27年間の長きにわたり、英語英文学科に在籍し学科の教育に邁進してこられました。英語英文学科に AES コース (Accelerated English Studies) が開設されたのが今から10年前の2006年のことですが、Wellman 先生は一貫してこのプログラムの中核を担ってこられました。AES は学習意欲が高い英語英文学科の学生の中でもさらに高い目標と強い意志を持つものだけを選抜してA、Bの2クラス約40名を組織し、より高い英語運用能力だけでなく海外の大学同様、コンテンツを英語で学ぶプログラムです。先生はその中でも上級クラスのAコースを中心とする科目を2-3年次と継続してご担当になり、英語英文学科学生に知的刺激と大きな薫陶を与え続けてこられました。またご専門のアメリカ文化・文学に関わり、国際学会での研究発表をはじめご自身でも何冊も小説や詩を出版される一方、近年では心理学 (特にユング) とアメリカ文化・文学の関連性について先鋭的な研究を進めてこられました。

また、英語英文学科には学科の性格上、多くのネイティブ・スピーカーの先生方に科目担当を依頼していますが、そのコーディネーターを長年にわたり務めてこられました。授業内容に関する調整はもとより、急な帰国や他大学への移動など、年度途中においても授業に不都合が生じる可能性がありますでしたが、Wellman 先生は常時臨機応変に対応され、先生のご尽力のおかげでそのような事態も未然に回避され、いつも円滑な授業運営を実現することができていました。このような舞台裏は、学生はもとより他の教員にも見えないところがありましたが、それを表に出すこともなく、時に喜々として事

にあたっておられた Wellman 先生の姿を見ながらいつか先生のような紳士的な態度がとれるようになりたいものだと憧れを懐いていました。

とはいえ、いつも冷静なお姿ばかりでなく、英語英文学科の会議では白熱した議論の中で人間味溢れる Wellman 先生の姿を垣間見る機会も少なからずありました。特に怒っておられたのは「英語能力が高い学生が必ずしも就職で成功するとは限らない」という日本社会の現状に対してでした。要領だけでスイスイと就職が決まる学生がいることにいらだちを隠されませんでした。それは AES など真剣に学生の英語能力向上に取り組んでこられたからこそその怒りであったことと思います。

Wellman 先生の学科でのもう一つの姿はエンターテイナーであったことです。英語英文学科の懇親会や今年の 1 年次 Speech Contest (12月開催)での MC、Friends of Shakespeare における風間末起子先生とのミニコントなど、時には抜群の腕のハーモニカを織り交ぜながら会を盛り上げてこられました。そうそうクリスマスの先生のサンタクロース姿も忘れることはできません。長身の Wellman 先生のサンタクロースは日本人が思い描く姿にぴったりで、突然出現するサプライズもクリスマスの風物詩としてぴったり合致するものでした。

A Good American としてアメリカ文化をまさに身を以て英語英文学科に体現してくださった Wellman 先生。優れた研究者、よき教師、素晴らしい同僚として私達の記憶から消えることはないと思います。シアトルに現在はお住まいですが、時には日本にお帰り頂き(できればクリスマスの時期に!)これからも変わらず私達に活力を与え続けて頂きたいと念願しております。Wellman 先生、長い間同志社女子大学の発展のためにお尽くし頂き本当にありがとうございました。

Barbara Fujiwara 先生がご退職になって早 1 年の年月が過ぎようとしています。Barbara 先生は 1987 年の同志社入社以来 28 年間の長きにわたり、

一貫して同志社女子大学の英語教育・研究に大きな貢献をしてこられました。短期大学部英米語科から2000年4月に現代社会学部・社会システム学科へ移られたあとも、その献身的姿勢に変わりはありませんでした。深い学問的知見に裏付けられた先生からの薫陶は、学生・卒業生だけでなく、教員、職員にも津々浦々に及ぶものがあり、ご退職なさった後にも私達の心に生き続けていることを実感しています。

先生のご専門は、Cultural Studies の領域ですが、特にアメリカにおける多文化社会とそこで確立されるべきアイデンティティーの問題について、さらにジェンダー論をクロスさせながら、文化と言語の問題を広い視点から鋭く論じてこられました。多くの学会発表、論文執筆、著書の発刊だけでなく、授業の中でその専門性を分かりやすく伝えてこられました。昨今、大学の教育でアクティブ・ラーニングの重要性が声高に叫ばれていますが、Barbara 先生は約30年前の英米語科の時期から、学生がアクティブに考え議論する秀逸な授業を時代の先駆けとして展開してこられました。対話を中心とする授業、というと簡単そうですが、母語でもそのような授業を展開することが困難な中で、学生にとって目標言語とはいえ第二言語としての英語を使わせながら、議論を展開させることは容易ではありません。それを可能にしてきたのは Barbara 先生の温かな心情と学生への優しい眼差し、そして揺るがない学問的知見であったと思います。ご自分も日本で生活をしながら第二言語習得の大変さを実感しておられるからこそ、学生が英語を話すことは必要であるが、それを当然とは考えず、細やかな scaffoldings (足場) を巧みに架けて、学生が話す内容を発見し構築する手助けを巧みになさっていました。

この姿勢は学生だけでなく、同僚である私達にも分け隔てなく優しく向けられていました。今も先生の研究室（決して整頓されたとは言いがたい状況でしたが、すいません！）をノックしたときに返ってくる独特の“Yes”という優しい英語が耳に残っています。相手の立場を思いやりながら、親しみ

を込めて適切なアドバイスをする姿勢にはいつも感嘆しておりました。教授会の際にも隣同志に着座しいろいろなことについて筆談していたのを懐かしく思い出します。Barbara 先生は“Trying to make our college a better place”を実践しておられたように思います。先生の命を受けて、提携を視野に Vermont 州にある先生の母校、SIT (School for International Training) 大学院を訪問させて頂いたのも（実現はしなかったものの）同志社女子大学をより学びやすく、研究しやすい環境にしたいという先生の熱意からだったと思います。そのことを一言で表現すると、それはきっと「良心」という言葉で表すことができるかもしれません。決して優しい先生ではなく、怒られると背筋が凍り付く思いでしたが、学生からも教員からもそして職員からも広く尊敬され愛されたのは、先生の真摯な気持ちとすべての考えが良心から発するものだったからだ、今思っています。

「良心を手腕に発揮する人物の涵養」が目的の同志社にあって、まさに Barbara 先生は良心の灯台の役目を果たしてこられました。Barbara 先生、長い間本当にありがとうございました。先生が退職された後も変わることなく、それぞれのところの中に先生の良心が生きています。先生の教えは「私も先生のような良心をもって行動できる人になりたい」という火として生きています。今後とも私達の良心の mentor としてご指導をどうぞよろしくお願い致します。